掌中蓼太歌句集 初編 全

掌中翠太發句集初篇

春之部

歳旦

元日やうみのうへもも伊勢路海

俳諧の掃きもはじめけさ乃春

筆捻ぬ松をそなへけり祝

黒豆の又者盤ゆ初のうま

万代や愛八橋年越そば

又日の風枝とうるはしく[illegible]代の美と
むらくこころもとなきの形容とあり

初春や十日もたれの[illegible]先

人日

橘まさしく雪に八色の美菜うな
のうるはしき夢ぬ代ゆゑ美菜橘
乳嵩如風[illegible]川[illegible]
流水[illegible]も美を冥[illegible]の美菜

子日

此君[illegible]小松の郭

梅

むめ咲やこのうるはしきひとの
梅枝[illegible]入日哉
世[illegible]や衣[illegible]袈裟衣

社頃

梅香や風[illegible]の向ちらう
紅梅や[illegible]のこころも[illegible]

紅を孫ちまてく梅の　ふかとりり

鶯

うくひすの丸ッ舌ッ初音哉

鶯ゑ鳴やそこらのあらまけり

老鶯巣

猫居しく鶯ゑ放足ちゑん

鶯ゑ鳴ゑ鳴ゑ放　柳しくを

二月三月影吹入陰や彼さう那

ゆりかゑ小枝もゑ　柳ゑ

此庭へ絶ゑ這へゑ　屋ゑ哉

柳ゑく柳ゑ柳ゑいとあはひり

樽ゑ〜て踏ゑ　ゑのゑ柳ゑ

震

洛陽ゑ新宿ゑ　ゑ哉ゑ

ゑすませて子やおすふらん　芦の露

蕉園

雅なる侍ら退くむ秋すゝ
素堂ふるく
夕霞あらしの鼓ゝ屋ゝ
春月
天に丈流須る月秋の那
打ふしの鶴もをし鶴月
麻もうく森ゝ鶴ゝ奈良ゝ月

猫恋

梅ゝむ秋まもをへし猫の恋
濡たゝ雲ゝ猫の恋
波雲
波雲や例ゝ雲文 雲 日山
波雲の隙を久ゝ雲の雲
春風
雲風や一度平 雲の作

春雨

鶯のぬれて啼たり春の雨

双六を延た吉原の雨

素面や拭るものふゝ簑そうり

大井ふく

三井寺弘法きく素の面秋水

陽炎

陽炎に揺ゆせてある屑火うな

濱松屋崖

岩角干蛸ゝゝけてく 桂う郎

風巾

きれ巾母を面ゝ涙ゝの中へ水

海苔

素海苔をとゝけて白し磯の波

裏根

蹉跎ゝ人城笑ふ起たゝ稲山

雛子

鶯ホトトギスの尾ながる雛の夢

夢ながる後雛のあふるゝ

涅槃

孫たん舎やおられて初ちる花の塚

蕨

とゞかゝ化しく発て燕そ

雲雀

乾風や きく一ぢまちよあけ雲雀

雲の影ゝ影ゝ陽ゝをひたる

蓬子

きゝめ子や余をゝ縄を追まゝ

蝶

蝶ゝや乞食の笑みうれしき

ぬきむうと邪味噌を迎る旅路

蛙

[illegible]の初時雨[illegible]やゆかしき
稚宮の秋〳〵ふる蟋蟀

菫 野の炎

そこ〳〵ひく牛もあつう〳〵菫菜

春色

喜ふ日や門申〳〵く梵論の新法師

八橋

秋〳〵〳〵春やむらさきの傷ましら

大磯

祐成の情〳〵十三の秋時うる

苗代

秋風ふ二筋小宮〳〵苗代田

雛

桃揺白鷺の雛もあり〳〵まし

消〳〵る炬も炬やわ〳〵秋の雛

菜摘

きちかうも女ちうけ豆菓子餅
下茎の桃又さくるの花は蓮もち

沙干

胸うつる女こゝろの沙干哉

出代

出てゆくや只あへまく大男

花

おもくとおもせてゆく花のかゝる水

花の陰

花ゆふかゝりて花の陰
分ふしてさくや花の面影 鄙
芝居皆やもむてもおもし 花盛

芳野

ちゝ雲やちる時花のよし野山
桜又屋しきりて
めつゝしや芳野とゝりて花一本
花吟小鮒も乃ぼるよしの川

芳野大滝

ちる花をあつめて流のとうさぎ

苔清水

苔清水花ちりけて結ひろう

神殿

むらし雨被るやうてや峯の花

櫻

世の中を三日見ぬ間の櫻かな

我宿の櫻はまれてちりしかり

別あるる形の形をさらうれ

ちるさをを又與よせん櫻かり

去るるく芳野の山中をとまるる

はるあるるの花動るなほめる

武蔵の国炭のうりをうりて

ひとうをとうをとうを櫻櫻の邪

岩ちりうを見へとちるやゆの櫻

うとうを月こそ出れちるさうう

弁南[illegible]

海棠

海棠やおくれて咲てもさきさめぬ
湯[illegible]や花の中よりうすい紫

鄭瑠

旅籠屋の夕[illegible]れ寒ふけし宵

芳軒

芳軒の緒方[illegible]の日[illegible]

[illegible]の[illegible]弱のひまより小鳥[illegible]

義

投[illegible]なつむ色[illegible]り松平義
[illegible]れ[illegible]日[illegible]し花の花

行春

夕雲花落るやまの[illegible]より
[illegible]
何[illegible]春[illegible]

夏之部

更衣

[illegible]

我[illegible]

武士[illegible]

白重

[illegible]

白[illegible]

郭公京ホトト　嵐山ホトト

若[illegible]

二の[illegible]

箱根

雲[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かすきに巣を離れて出る鶴
一とせ示三の月月やはるきを
求めしてまたあるかとそ見すす
世を警ふ法の法も乃を海に郭公

滝佛

山寺や又色つまる花山堂

牡丹

月を部屋に新を牡丹の内うり式

樹ちる果や不あんの重ねけ
死をまつ面ぬしあぬ牡丹哉

葵祭

常小僧を末のそ〳〵とそ弦うう

嬰粟

ちゝけ〳〵と繰うるき月秋式

麦秋

乞食せん世をあとうあとうあとう麦

旅深しとあるやうに麦も秋の景
麦の穂も出揃ふ　卯月八日式

筆　鍬

作の子や花ちるさとの男ぎ
ふるあるを花ふるさとし　和つ子

鄭

雅よあう宿りて花を萩鄭
津のくふち伯母よこうを鄭の歴

花柚

雅光とふまんそくを形花柚式

下閑

下閑よ乾ゐぬ閑　伽地ちの式

分延

武山の茂や数里一字　より

宮津山

菊原乃野ちく鉄るちけ里ろう

蒲萄　水鶏　翡翠

うしきりや湖岸をて次ぐ蒲萄

日やけ田に水門ひらく水雞哉

屋ぶりきの花ひらく蓮に翡翠哉

新茶　梅の尾

唐土のさびしさうなる新茶哉

ちらちら活るあり〳〵

嘘嘘の葉形熨斗活の新茶哉

宋呼号

我れ来たりこゝろさうこんこゝ

竹まし木まし和らうこんこゝ

蛍

うしろうら猶そしてその蛍うれ

退きさくハ月をうるふる蛍哉

端午　蕉波津少〳〵

懺悔の果をあらはに帆然紙

百炼抄

炼うけく境に著るかり　又日月

競馬

翠簾越の弾小歌うんてを色る

鬼拍子の石を弱く

えてのくやいさ　帷子のかすり

又月雨

月雨やわるる秋色なる雲の月

秋にせるくはるる花ちりあり

川越る日もあるかりや皐月雨

夏初川を待勢熊野の二神をもめて

きりんえたるくの西とや夏小森雨の夕

晴もうれしく

紀の月小夏初川や皐月哉

田植　住吉侍田

乳ちの松西氏出の乙女てくより川

外の名やのうとなるもかりうと夏

ふりしやや

神苗やりの弧うさ月の衣うさ

二見樽のかとりよ屋を結し伝山石芸
上田三反味噌八斗小出ようよりあつの
よれ示とある孫師のれ家をおひ出て
そこ示商家の名乃れりりれて

玉苗より門田植けりいくよ餅
山陰や人目あるて田うへうた

田植

山辺より脊中ふ辛し田植哉
植いそぬ夫婦なりり田植哉

蕉翁　鶴亀

とろろかけたるを藤ふ今年
鶴亀うひや玉子よ儀子ふ当年
つのを鶴や書もちより鶴も木のうろ

敦賀　紙帳

変うとまる森ぬ里の敦賀哉
敦賀大やうう里陽しくも松の月

紙屋寺

尼寺や百粉白粉も數多り菊

高野

數の花ぬも浮世のかをる樹の月

我屋敷に紙帳うしやうよや

業平の知る花ゝ紙帳哉

貸家

菊作る思案のあや美人巻

ものうきものや菊の式六月

死ぬるとも菊ぬるとも

里人ぬるとも花ぬるとも

小倉中山

紫陽花や禁丹ぬる品八ぬる恋

紀州熱田

荒磯や稚子ぬる親ぬるも

秦徐福古墳

稚子ぬる唐とやぬるとも塚ぬる

氷室　紙屋舎

[illegible]
紙雲を舎や京を日かさのゝ下とり

竹婦人　簟　蚕

まゝをよりあるひをあらう井路人
暁を小町うはわや井戸婦人
絵鼓又風をもとられをもひろ
客待りふ月遠る墨のり来ぶ

団扇　扇

あのうふ　うちを考ふや　小形城
柱つけの四つ　うんく来る団扇
独間の跡を扇形めゝ　れ
いをけをを子　よられる扇を

清水　於り柳

初ゝとをひ　腸清子　清ゑう邪

自得

晒月ゝをを　晴まる　月日ゑ

暑　西陣　夏月

弦虎渡るもあるべしと暑う郷
壁山より市のあるものなり　夏の月

沖縄　雲峯　夕立

雅人の凱陣とて　沖なまに
雲峯　夕立　乃ぶるかとうたあり　雲の峯
夕立やれ合傘を　晴るるかの

納涼

岩ほとふうつとしんや　夕　まくえん
涼しさや寺ゆ碁石の音ばかり
木陰　弘法　落葉　栗　世　ゆ　ゆ　ゆ
　　北京川　岱
ふるこ　ふ　入　ふる　帆　あり　夕　すこ
　　白隠禅師　相見　　蕉花
涼しさや　ふ　和尚と　田子の浦
　　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　涼し

下紐哭
下紐の関を落毎や　申ふきうん
麻竹ら田家よりあり
牛馬のまろうもちりぬ　夕ぞ
四条行京
風涼し扇の立葵　涼葵を
不忘山
かゝる日もをるまれなの山涼し
序稜
人さゝく涼見えんとう　序稜川

秋之部

立秋　一集

秋ぞ一ゆゝ面白　雲より
出の書れ下前哭や　乃妹
忘れは秋ぞ新なる　この那
暦ほと音しく相の一葉うな
系きまて琴もちるや　相の秋
七夕

四やすさ蓑はたまん星　初秋

鶴や櫓ありてあやつりてをつし

仙府の人〻てらさめられて

七星や星の一枝よりこんきん

七種や葛よりうめて　萩千寿

秋草

蓑や秋を知るたれあり

我ものゝ多れさひし　女郎花

高野ちゝ

高野の井や月を子月のふくさ

蓑の花嵐のゝちをさうれ

淋しさの松へうれ子すたなる

ちまをあるもかくてふさひし　瓜

魂祭　燈籠　躍

世の中や朝もさられむまつり

人のをく霧とちりはてむまれを

蓑くるを初小秋あり　言兜菴

焼篭やをとろ〳〵しき風の前
秋風や人まれ〳〵に躍る郭
飛〳〵や旅人馬を打たるる

稲妻　叡　昨子　添水

稲つまや闇さへ淺ましふ破の実
いなつまや桂の枝のかゝるまで
刈跡の落ちまろるいかこの船
淋〳〵居る身のうらやゝ鳴子引

秋風のあらを切るて添水の郭
月細う〳〵しく減して添水哉

稲　筑府竹林精舎
はあ〳〵ろ雅やかに花瓶又器一色
紫陽花と又器に盛るも美〳〵
とのこの方と交毋〳〵て

刈の〳〵に四つ〳〵も残し又器一色

蛍

十さうり耳ある秋なり蛍乃こゑ
蛍の声や屋形なつけて出船

冬瓜の傷ましかり　きりぎす
蜩や　塚を洗　来る　秋の夢

秋風

秋風やうるおひあるは一墓ばかり

秋風や　月明　湖水の郷

茅文畧

山をぬけ　川あり　秋の夢

仙春あるを　尾留別

名ばかり川　細ぐ　素絹あるとき

ばしいまの人の面影もおぼろ

跡先　ある　さと　拾ふ　秋の夢

秋浦吟

秋風や　猿も　ひくくなれ　まくき

必親を人の宗匠　日の残暑　と云れ　拾

于　ある　徨　来る　秋乃　かな

秋柳　花野　秋夜　霧

いそうや　枝ひろし　しくしく　柳

ながら　壁　月　ながら　花野　哉

合歓の木　花　動　せん　老の秋

白露の果をあらそふ玉川

秋蕎　蕎麦花　蔓椒　瓢　柿

百姓一里くゝと秋のくれ

徒歩さきよりのぼるも見えて秋の蕎

蝶蕎の目ふもも後限や蕎麦花

俳諧の乗座おそろしこうろし

うゝくゝまさ花のつるふくへ

初荒ゝ時ゝ柿の木末くれ

雁　小雪　初雪　結霜

初雪や水車と落葉あのうへ

動くとうの二羽もくゝ雁もあり

崩くゝハくゝへふかせすや年　雀

下総浦庭くゝ二百

初風や小菊のうゝ落くゝし

鶴鐘や激来そへて岩はくゝ

高歌ちるき法華経且ゝ温泉の山ゝりゝ送ゝ

月ゝ時そちゝ向へそまちゝむけ

東歌　十六首　初句

月を待つ　月を待つ　月を待つ　山の入る　歌引

名月を　待つとて　見れば　出で　雲間

出でて　入りぬる　月の　名残　惜しみ

名月の　雲間　待つ　霧　もも　すそ

名月を　待つ　海　東　さ　さ　も　袖

名月や　称　くも　見えて　歌　名

俤　八　百　屋　の　門　や　月

十六夜や　ちゐ　園　の　塔　ゆ

月　待　や　作　の　裏　月　人　乃　夢

題分　初逢　相撲　歌

金屏　風　吹　ひ　く　聖　け　式

旅人　の　ち　を　扱　や　初　む　え

初　摩　や　日　や　け　て　甲　嬰　の　思　おの

大　内　形　相　ち　産　や　相　撲　ち　を

出　ち　ち　や　発　ち　ち　人　ち　る　角　力　乱

女房と相撲打ちしてをりける
宗房とまさに草庵の
竹垣ゆく枝樊噲の歌をうれ

菊

蕎麦くさくもさきまるや菊花
ものいふ客と亭主と白菊と
低城の松ふるやと菊活けて
あの蕎麦ようもてる石垣 咀乃菊

木曾路

蕎麦ことふ 祖父めける菊の山路哉
後月 蕎麦 茸 ゆ 粘

若ゆくる菊ちるや 十三歳
懸けぬ冊 冊あり 後の月
金沢にて
隈くを海士の樊や 十三歳
影蕎麦ところそ 盃の菊のち
影そそぐ 稚の音

葦辺や月の干潟の小松ちる
うゝ枯や迎る丸木橋
うゝ枯や月の衰ふる目のあれ

紅葉　孤

九重ゝ中年無山のゆきれ
掃ども雲へさしゝ夕の紅葉
紅葉ちく行ちうき筆の紅葉式
見ふりゝゝく年波ちる孤れ

茨壁氏の壁眺橋ちる
もさ伝——き長月比孤史れ

廉　新酒　濁酒　落水　九月尽

廉孤ちや子弱ち出るもちの川
山紫と子稚の涙ホ松ち
新酒あり孤ち鄰の雨屋せん
隈ちことのくちむ和ホふる酒
帆のうふちの子成けり落し水
秋風と来ちし一の出帆へ帆式

冬之部

初冬　時雨

初冬の機に入るやさりそめ
独ぬるくや初しぐれ
秋風の義に時雨
色ぬ義ふ初冬
雪の笠さうしぐれ

小春　十夜　口切

山も今撫丈の笑ふ　小春の那
冴返る日まとくく小さるを
我家の婆ゝ十夜ふ
口切や苦味の價ふ　唐あしき

落葉　枯柳　冬牡丹　枯蘆　鶏頭　冬蕗

又春の来るも見えぬ蕗の葉
枯柳花ふけ見るり
富うとゝ冬牡丹

牛の尾弘外ちらこうぬ様ちうる
ひとりの藻のそうぬやさそうる
夜ちうて見物ちうんぬ物也ちうり
帰花 巨燵 風 水仙 駄市 紙子 食
おりてきる地そのあるを作り花
猩々ちく次ぎ次ぎちうこそ所式
長居ちして巨燵も閉ちる長式
ホクシや影の外ちの八月記を

河内の名ちは流次ちる仙花
きちる猿ちち外別ちく次市ちれ
俳諧の市ちうちれて駄市ちな
客ちまるの果を好まこ客ちまるの果を失ち
客ちまちく我ホ書ちる紙子ちる
老蒙巣
戸ちぬを我綿ちう紙ちする
菜大根露見ちく老を下ちうん
細代市 暖市 歳暮 歳亟

世をうきのうつるにつけて年月代れ
所とそなれるものいまぬるるを
なるにまた一ちんの警をぬく矢音
新月をや初秋白露も菊の香
發言や郭公義さけるに屑ま
東水仕ら岸撰火水音
減立の門角くなる素の琴
障子をるこそろよりの水

一年しをいハ日乃 出柱ハ那
文る東や岸ものて岸をそく音
ものこの火や影ほたるる老ひを
水音 影
警警ちちこりや蛩の右むり
子音峰東や名月ほ照のし
友んえて月東の影猿ゝ岸
吹上ゝ沖ゝるりのちとり弓

雪 弾初

とりひとをれて風あり秋の雲

降らぬ雲の雲の雲の雲やあらぬ

雲てゆ雲ふらぬ雲や雲ぬ雲の

雲打ゆ雲打ゆ雲打ゆ雲ふ雲

白雲の中ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲

ぬ雲ぬ雲ぬ雲ぬ雲ぬ雲ぬ雲

弾たき月雲ゆ月雲ゆ月雲ゆ

蹴掃 蹴鞠の一名なり 蹴所 ちく居とうの所なり

神の雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ 掃

年内立春

歌書ゆ雲ゆ雲ゆ年ゆ雲ゆ雲ゆ井ゆ雲ゆ雲

雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

三弦と唐土ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

我雲の雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

金銀の雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

浄破利の水とうの字源元式

節分　家庭　宗弘

鬼ハ外　福ハ内へとなる教式

厄拂　疫ハらひ　月教式

きらら　教嵐　式　一万式

なしはなうるわかの朕うるうう

さまうるるるるるるるるるるるる

風鈴ときく時　光　名誉式